

知ることにはきつと誰かを助ける力になる

福井大学教育学部附属義務教育学校 七年 上田 友紀乃

白杖(はくじょう)を知っていますか?どんな人が持つものか知っていますか?

白杖とは、視覚に障害がある人が持つ「視覚障害者安全つえ」のことであり、視覚障害があることを周囲に知らせたり、触覚を通じて路面の情報を収集したり、路面上にある障害物を検知する機能があるそうです(日本歩行訓練士会ホームページを参照)。

「視覚に障害がある人」と聞くと、多くの人は全盲の人を思い浮かべるかもしれませんが。私も昔はそう思っていました。しかし、視覚障害は個人差が大きい障害であり、全く光を感じることもない全盲の人、メガネやコンタクトレンズで矯正しても視力が悪い弱視の人、視野が欠けたり狭くなったりする視野障害の人など、多様な状態があります。

私が視覚障害について知るきっかけをくれたのは伯母でした。伯母は二十代のころに目の病気がわかり、視覚障害者になりました。暗い場所で見えづらかったり、両

目の視野が徐々に狭くなる、「網膜色素変性症」という治療法がまだ確立されていない難病が原因です。伯母は病気がわかるまでは車の運転を楽しんでいましたが、事故を起こすリスクを考え、運転免許を返納して車の運転をやめたそうです。それ以降は外出する際には白杖を持ち、道路の点字ブロックなどにも頼りながら歩いています。その伯母がある時こう言っていました。

「白杖を持って電車に乗っていたら、『あの人、白杖持っているのにスマホ見てる。本当は見えているんじゃない？』って言われちゃった」

確かに伯母は見えています。でも視野がとても狭く、ちくわの穴をのぞいているような見え方だそうです。私はその話を聞いた時、自分の手で筒を作って覗いてみました。その視界はいつも自分が見ているものとはまるで違い、視力が悪くなったのかと勘違いするほど、見たいものの全体像が把握できずにびっくりしました。この状態で道を歩くのも、電車に乗るのも、とても疲れるだろうし、本当に怖いだらうなと想像しました。それと同時に、他の人から無理解な言葉を投げかけられた伯母の気持ちを思い、悲しい気持ちがかみ上げてきました。

でも、こうも思いました。もしかしたらその人はただ「知らなかった」のかもしれない。白杖を持つ人はすべ

ての人が全盲で、それ以外の事情で白杖を持つことはな
いと思っていたのかもしれない。そもそも弱視や視野障
害の人がいるということ自体知らなかったのかもしれま
せん。

「知らない」ということは悪ではないと私は思います。
生きていく中で、きっと死ぬまで毎日「今まで知らなか
ったこと」に触れる機会があると思います。その時にき
ちんと気づき、考え、必要であれば自分の行動を変える
ことで、障害がある人も、ない人も、もっと広い意味で
何かの困難を抱える人も、この社会に暮らすすべての人
が生きやすくなる。自分の知っていることが世の中のす
べてではないと知り、意識し、他者の抱える困難に思い
を致すことが大切なのだと感じました。

私の母も今年、視覚障害者になりました。伯母と同じ
病気でした。病気の告知を受けた直後の母はショックを
受けていたようでしたが、その後、割とすんなりと自分
の障害を受け入れることができているように感じました。
母は自分と同じ障害を抱えた伯母が、いきいきと人生を
楽しんでいる様子を知っていたからかもしれません。

私も知っています。障害があっても伯母や母は人生を
楽しみながら生きています。かつて美術の教員をしてい
た伯母は、念願だった子ども向けの絵画教室を始めまし

た。画材やキャンバスの準備をする伯母は、忙しそうながらもいきいきしていました。母は私たち四人の子ども
の成長を何よりも楽しみに、今までと変わらず仕事を続け、
これからたくさん場所に私たちを連れていきたいのだ
そうです。そんな伯母や母は、私にとって、とても強くてかっ
こいい憧れの存在です。

私は今年中学生になり、行動範囲がぐんと広がり、自分
一人で外出する機会も増えました。中学生になってから、よく
父や母に「周りに困っている人がいたら自分ができることは
ないか考えてみよう」と言われるようになりました。それは
これから自分が「誰かに助けてもらった存在」に成長する
ための期間に入ったということなのだと思います。まずは
自分の周りにいるかもしれない困難を抱えた人に気づく
ことができるように、「知ることはきっと誰かを助ける力に
なる」という気持ちを持ち、そして実際に困っている人を見
かけたら、一歩踏み出して声をかけ、自分のできるサポート
をしたいと思っています。